

日本語文法 (史的研究)

今井 亨

2018年に公表された研究・文献のうち、基礎的なものと今後発展しそうな分野・手法のものを取り上げる。

宮下拓三著『竹取物語助動詞解釈集成』(右文書院、2018.10)は、竹取物語(古活字十行本)に現れるすべての助動詞の用例を、助動詞の意味・活用形ごとにまとめた基礎的研究資料である。意味定義・分類を注意深く行いつつ、20種の注釈書類における解釈も逐一参照して、意味の取りように揺れの見られる例についてはそれぞれの意味の項に挙げて注記している。研究の進展とともに修正された解釈もあるわけだが、なお検討する余地も少なくないことに気づかされる。かつてこれと似た方針をとった書に、紫式部日記に現れる形容詞等を説き進めた、木下美著『紫式部日記用語の調査解明』(1986.12、目次によると下巻も予定されていたようだが)があったが、こうした二次的整理を含んだ基礎的研究が整えられることは意義深い。

青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究4』(ひつじ書房、2018.10)は、隔年刊行で当該研究の潮流を確かめるのに欠かせないシリーズとなってきている。その「テーマ解説」で取り上げられた「歴史語用論」も、高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』(ひつじ書房、2018.5)が出て、着実に成果が重ねられている。由来が異なるにせよ、では従来の表現性・価値・効果に迫った研究とはどう交わって

くるのか。山岡政紀・牧原功・小野正樹著『新版 日本語語用論入門』(明治書院、2018.8、旧版2010)がコミュニケーション理論の概説書としてまとめ直されたことで、さらに多くの理解者を得て、歴史的研究においても議論が深まることを期待したい。

ちくま学芸文庫や岩波文庫で盛んな名著の復刊は、原典の蔵する豊かさを再認識させてくれる。書肆心水からは山田孝雄に次いで、時枝誠記著『時枝誠記論文選 言語過程説とは何か』(書肆心水、2018.8)・『時枝言語学入門 国語学への道』(書肆心水、2018.7)が出た。パロールに軸足を置いて、「言語は通じないものである」(『国語学原論 続篇』)ことを前提にした時枝理論は、我が国における語学的コミュニケーション論の先駆ともいえそうだが、文法の「詞・辞」「入れ子型構造」論以外どの程度正当に継承されてきたのだろうか。先年出た『現代文解釈法』(論創社、2017.11、元版1941)の著者塚本哲三も、その実用的功績は計り知れない。国語学史・教育史・実用史を横断する機が熟している。

矢島正浩「タラ節の用法変化」(『国語国文学報』76、2018.3)は、上代から近世後期にわたる5800例以上を鮮やかに処理し、安部清哉「係り助詞(ナム・ゾ・コソ)の四文体別変遷史から見た『篁物語』」(『国語と国文学』95-6、2018.6)は、平安期の1600例以上を分析した「松岡データ」に『篁物語』54例をからめて掘り下げている。コーパスの整備が進むなかで、それら大量データの操り方を示してくれてもいる。

(岐阜聖徳学園大学)